

地域活性化センター土日集中セミナー

「魅力化による高校の生き残り地域活性化」
(企画書)

2015年4月

一般社団法人地域活性化センター

地域活性化センター土日集中セミナー
「魅力化による高校の生き残り」と地域活性化」

1. 趣旨

いわゆる増田レポートに端を発した消滅自治体論議とその後に巻き起こる地方創生戦略の中で人口減少社会の活力維持が大きな論点となってきた。また人口減少による定員割れから統廃合危機に直面する地域の高校も多い。しかしながら、地域力維持という観点からは地域の高校の存続は必須の課題であり、高校存続に向け魅力化による入学者増を画策する試みが全国各地で行われ始めている。地方創生戦略策定の中で、地域の高校はどうあるべきか、地域と高校はどう連携して魅力化を図り、地域力維持を図ってゆくかを考えるべき重要なタイミングを迎えている。

前年度に続き「魅力化による高校の生き残り」と地域活性化」をテーマに土日集中セミナーを開催する。今年度は文部科学省スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定された能勢高校（農業系総合学科高校）、松尾高校（福祉教育推進校）のグローバル化による魅力化の方向性を探るとともに道立から市立に移管するなか、調理クラスに的を絞り生き残りを図る三笠高校、キャリア教育による地域再生、地域連携を図る可児高校の担当者を迎えてその生き残り策を議論する。また、佐賀県武雄市は市立小学校の授業を巡り学習塾「花まる学習会」と提携し官、民、地域が一体となって新しい公教育づくりを推進している。花まる学習会を迎え小中学校の地域と連動した取り組みを聞く。教育が変わる曲がり角の時代、入試改革も進んでいる。地域と教育は如何に連携し、如何なる地方創生戦略を編み出すかを考える2日間のセミナーを開催する。

2. 日時；7月11日（土）～12日（日）の2日間

3. 場所；地域活性化センター大会議室

4. 主任講師；

齊藤俊幸氏（地域再生マネージャー）

藤岡慎二氏（隠岐島前高校教育ディレクター）

真鍋政明氏（大阪府立能勢高校長；農業系総合学科高校のSGH校指定）

齊藤伸之氏（千葉県立松尾高校長；福祉教育推進校初のSGH指定校）

松島伸浩氏（花まる学習会；佐賀県武雄市、住民と地域が一体となった新しい公教育を実践）

植井慎氏（元北海道三笠市立三笠高校教諭、現札幌白陵高等学校教諭；道立から市立へ移管）

浦崎太郎氏（岐阜県立可児高校、地域再生×高校キャリア教育）

注）講師は変更する可能性がある。

5. 主催；一般社団法人地域活性化センター

6. 受講対象者；

首長、地方議会議員、高校教職員、教育委員会職員、大学生、地域活性化に熱意のある方等

7. 受講人員；

最低催行人員 20 名、最大定員 50 人程度

8. 参加費；

一般；25,000 円、大学生；10,000 円

9. プログラム(案)

表 9-1 プログラム(案)

(平成 27 年 4 月 4 日現在)

月日	時間	講義概要又は演題	講師
7/11 (土) 13 時～ 20 時	12：30～13：00 (30 分)	受付	地域活性化センター
	13：00～13：20 (20 分)	開校式	地域活性化センター 佐々木事務局長、前 神室長、相澤副参事
	13：20～14：20 (60 分)	基調講演；「高校存続と地方創生」	斉藤俊幸氏（地域再 生マネージャー）
	(10 分)	(休憩)	
	14：30～15：20 (50 分)	3 年連続定員割れで存続危機の高校、 農業高校の SGH 指定校、「国際協力の 現場で判断力と実践力を培うグロ ーバル人材研究」	真鍋政明氏（大阪府 立能勢高校長；農業 高校の SGH 校指定）
	(10 分)	(休憩)	
	15：30～16：20 (50 分)	福祉教育推進校初の SGH 指定校、「地 域から考えるグローバルエイジング」 団塊の世代が後期高齢者となる 2025 年問題に地域とともに立ち向かう	斉藤伸之氏（千葉県 立松尾高校長；福祉 教育推進校初の SGH 指定校）
	(10 分)	(休憩)	
	16：30～17：30	道立から市立への移管、調理へ特化し	植井慎氏（元北海道

	(60分)	生き残りを図る。	三笠市立三笠高校教諭、現札幌白陵高等学校教諭；道立から市立へ移管)
	17:30~18:30 (60分)	討論「地域と高校は如何にして存続に向けた魅力化を図るか」	斉藤俊幸
	18:30~20:00	交流会	※椎川理事長出席予定
7/12 (日) 9時~ 12時40分	9:00~9:50 (50分)	「入試が変わる、教育が変わる、地域が変わる」	藤岡慎二氏（隠岐島前高校公営塾教育ディレクター）
	(10分)	(休憩)	
	10:00~10:50 (50分)	小中学校で始まっている新しい公教育と高校との連携。佐賀県武雄市は市立小学校の授業を巡り学習塾「花まる学習会」と提携し官、民、地域が一体となって新しい公教育づくりを推進。	松島伸浩氏（花まる学習会）
	(10分)	(休憩)	
	11:00~12:00 (60分)	地域で行う地域再生×高校キャリア教育	浦崎太郎氏（岐阜県立可児高校、文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会委員）
	12:00~12:50	討論「学校存続を考える」	浦崎太郎氏 植井慎氏
	12:50~13:00 (10分)	閉講式（講義終了・解散）	地域活性化センター

注) 講師、プログラムは変更する可能性がある。

三笠高校の道立から市立への移管の経緯

植井真先生ヒアリング

市町村立高校は北海道を中心に全国で 20 校程度ある。組合立高校を含めると全国で 23 校ある。財政規模の小さな町村では昔は町村立の高校が多かった。三笠高校は北海道から三笠市に移管したのではなく、北海道立高校を廃校し、三笠市立高校を新設した。施設は北海道より無償提供を受けた。三笠市は 10 人の教員に対する人件費を支払っているが、高校標準法による普通交付税が市町村に入ってきており、学校運営に関する持ち出しはないものの、非常勤講師や管理人などの持ち出しはあり、学費が無料のため、黒字経営とは言えない。三笠市では学生寮を増設した。PFI で事業化したと聞いた。120 人を収容する寮の存在意義は大きい。寮費は無償、ただし生徒から食費を毎月 3 万円徴収している。雇用を生み、食材などの資金循環を生む。三笠高校は調理科に特化したため、地元の生徒が行けない高校になってしまった。必ずしも地元の高校とは言えない。隠岐島前高校のように進学へ向けた教育を高め、普通高校として歩むことがよかったのかも知れない。しかし、市町村立により地域で高校が存続する価値は大きく、おといねっふ高校のように工芸デザインで生き残る姿は必ずしも否定されないであろう。すぐれた教員、すぐれた生徒を集められればすぐれた学校はできる。山梨県北杜市にある北杜市立甲陵中学校・高等学校は進学校としてのブランドが確立している。代々木ゼミナールが入り大改革を進めた。地元に進学校があり行きたくても行けないという姿も市立三笠高校と対比して興味深い存在だ。人口減少社会の到来で都道府県は都市部の高校のマンモス化を図る中、都市部の高校だけが残って、地方の公立高校の教員の雇用が維持できなくなる可能性がある。教員の生き残り競争も始まるのではないか。まちづくりを柱とした専門高校の成立の可能性がある。学びの柱はまちづくり。高校 3 年間で履修する単位は 90 単位であり、このうちまちづくりの分野が 25 単位あれば専門高校は成立する。年間 8 単位の履修は、1 週間で言えば 1 日 6 時間と午後 2 時間に該当する。役所の分野に対応し保健・福祉、産業、消防署などの部署を訪れ、アクティブラーニングで学問領域を深めるのも手ではないか。

小学校教育（佐賀県武雄市；花まる学習会）

松島伸浩先生ヒアリング

佐賀県武雄市が市立小学校の授業で提携しているのが、学習塾の「花まる学習会」だ。これから果たして官、民、地域が一体となった新しい公教育づくりが登場するのだろうか。また、こうした教育が人口増加の誘因となるのだろうか。松島伸浩さんから話を聞いた。

（以下松島さん発言から）

樋渡前市長が目指していたことそれは図書館、病院、教育という分野をとがらせて外から人が来てもらえる武雄市をつくること、まさしく今地方創生で問われている人口誘致問題だったのではないかと。報道 2001 というテレビ番組に、藤原和博氏（よのなか科の創設者）と高濱正伸氏（花まる学習会代表）が出会い藤原氏が樋渡元市長につながったのが最初の出会いだ。

学習塾が入ることに関して小学校の先生の反対は多かった。中身を知らない人は反対するものだ。丁寧に説明することによって、今は先生自身が率先して変わろうと全面協力をいただいている。学習指導要領を遵守しながらも国語、算数等の授業を塾の教科書を活用して実施している。学校の先生は塾授業を開始する前に研修を受けた。現在は市内の小学校 2 校に 1 名ずつ、花まる学習会から人材を派遣している。この原資は地域おこし協力隊制度を活用している。プログラムはシンプルでパッケージ化されている。花まる学習会はここで得た経験を広めてゆくことが目的で教材を作る費用程度で金は市からもっていない。

花まる学習会の柱は思考力、国語力、野外体験が柱。地方の公教育を変えたい。子どもが主体的に考えなくなった。どうしたら育ててゆくのかわからない。小学校低学年教育を変えていかなくてはいけない。公教育で今と違う教育が導入できないかと考えてきた。こうした取り組みを武雄市に参画する前に長野県で 8 年間取り組んできた。パズルや漢字の勉強で子どもたちの学力がついた、考える力がついたと言われてきた。

受験勉強では社会に通用する人材が育成できない。受験では教えられない分野があるのではないかと。ベンチャー企業の創業者はまじめに勉強してこなかった人が多い。「ロックをやっていました」と言う人が多い（笑）。優等生は前例に学ぶ姿勢があり、踏み出せない弱さがある。

探究は重要である。花まる学習会では野外体験で川への飛び込みを行っている。（飛び込む場所に支える人がおり安全に配慮しているが、リスクがあり公教育が踏み込めないところだ。）子どもは最初は怖がる。しかし、飛び込めちゃう子供がいる。同級生に応援されると飛び込む。子どもは意地っ張り。「僕だって

できる」と思い飛び込む子も増えてくる。そして飛び込める。2回目からはスイスイ飛び込めちゃう。

意識の壁を取り払うことが重要だ。何事も挑戦する意識を作ることが第1歩だ。自然とのふれあいが大切だ。挑戦する子を育てる。2泊3日の野外活動で子供たちは変わる。成長する。野外体験にすべてがある。外で遊ぶと思考力がつく。学校ではやれない。

20年前から横断型の授業を展開しておく。てきぱきと丁寧に写し取る転写。四字熟語。遊びながら勉強する青空授業。地域でやれるアクティブラーニングはたくさんある。

- ・花まる学習会の社員は180名
- ・教室数120か所、250教室
- ・創業22年目
- ・1クラス30人で5人の先生がつく教育体制
- ・1か月8000円（公文式と変わらない、一般の塾は月3万円、40人体制）
- ・会員数2万人

浦崎太郎先生講演メモ（岐阜県立可児高校）

いま、高校を地域に埋め戻すとき
～地方創生に担い手育成機能をどう組み込むか。

地域に学びの場を持たない進学校は大学入試改革（社会の要請）に対応できない。「地域の自治」と「学校の授業」は、自助、共助、公助の観点から、全く重なる構造、課題を持っている。（自助、共助の崩壊を学校が引き受けざるを得ないことにより、公助たる教育に全力を注げなくなっている。）今の高校生は、昔の幼稚園児と同レベルの社会性（同世代の人間関係のみ）で、世に放り出されようとしている。（彼らにとっても、社会にとっても不幸）地域再生なくして高校再生なし。高校再生なくして地域再生なし（地域との関わりという基盤なくして、高校が都会の大学に押し込むことを自己目的化した人材の放出装置になっている）



—国際協力の現場で判断力と実践力を培うグローバル人材研究—



目標

現状を理解しグローバルな見識を持って判断できる生徒の育成

地域課題に直面し国際協力の手法を活用し実践できる生徒の育成

グローバルな視点を持って地域で協働できる生徒の育成

グローバルな現場で能勢町や能勢高校を語る生徒の育成

総合学科 連携型中高一貫教育校 コネスコスクール

課題研究のテーマ (SGH重点分野講座)

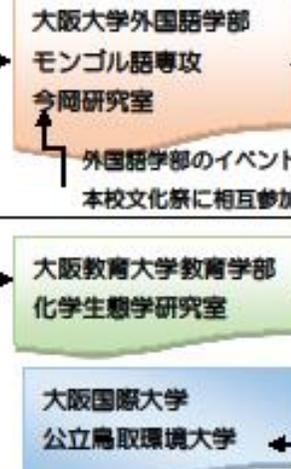


国際交流の経験・関係を活かした研究開発
農業教育の研さんを活かした研究開発
地域の課題解決にもつながる研究開発

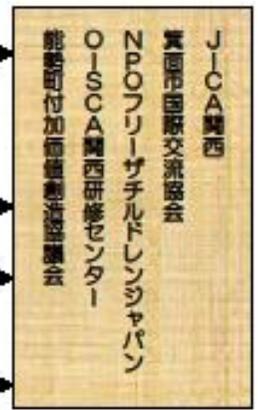
海外での実態調査 支援機関・大学等との連携



国内の大学との連携



国内の機関との連携

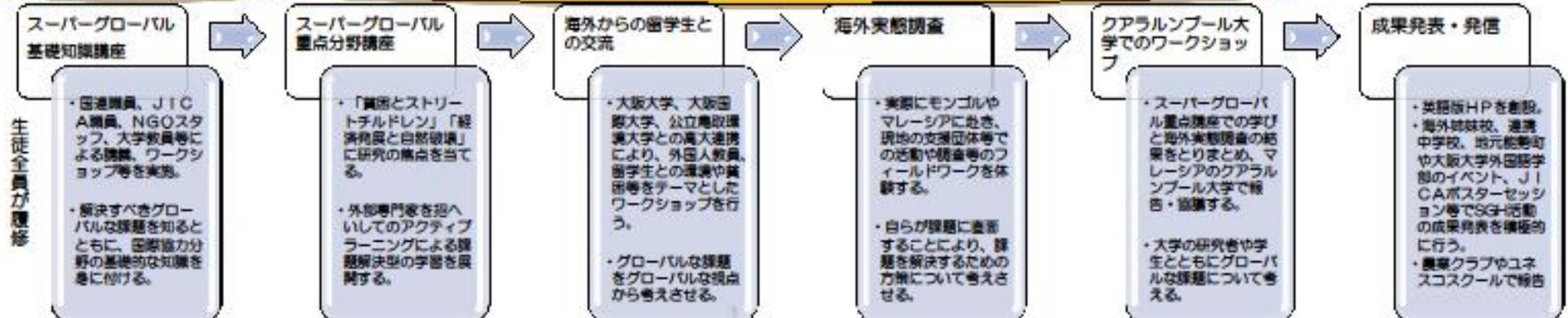


海外からの留学生との交流

1年次：産業社会と人間 農業と環境
2年次：総合的な学習の時間

2・3年次：(学) スーパーグローバルスタディ (選択)

研究開発のカリキュラム概要



生徒全員が履修